
デスティニーな兄

六

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デスティニーな兄

【Zコード】

Z7546Z

【作者名】

六

【あらすじ】

最早物語は終わり、そして皆は明日へと歩き始める。

それぞれの歩みはあるだろうけれど、それでも歩む先の道が混じつている事を信じながら。

切っ掛けとなつた人物は織斑万春。織斑三兄妹の長男。またの名をラストサムライ。

どこかへと消えてしまつた彼を知るため、彼女もまた歩み始める。

ハルク園一学年担任
在学年担任

織斑千冬（前書き）

メリークリスマス。
これが六のクリスマスプレゼントです。

兄さんのことか。ああ、よく覚えてる。

田舎を闊(ひろ)じなくてはまつぱつと、刀を揮(う)わの姿が田に焼きついてこる。

それで、お前は兄さん有何を聞きたいんだ？

ふむ、思い出、か。

しかし、あまりお前が期待できるものなんてないだらう。いや、決して兄さんと私の仲が良くなかった、といつわけではない。寧ろ私たちは昔からずつと仲がよかつたな。ただお前が望むような珍しい過去なんて私たちにはなかつた。それだけさ。それでも聞きたいか？

……よし、なれば少しだけ教えてやる。織斑万春といつ男の過去を。

ふん、身構えなくてもいい。それほど面白くもない話しだしな。

取り合えず、お前も知っているだろ？が私たち兄妹が両親に捨てられてからのことでも話すか。一夏は覚えていないだろ？が、両親は私たち大事にしていた。それこそ普通の家族だった。少なくとも仲は良かったと言えるだろ？特筆する事もない、ただの家族だ。

しかし、ある日忽然との人たちが私たちの前から消えてからそれも変わった。

中でも兄さんはすぐさま仕事を始めたな。あの人たちがいなくなつた次の日から、兄さんは篠ノ之柳韻さんの紹介で仕事をしていた。だからこそあの頃私たち兄妹は食い扶持を繋げる事ができたが、その時は兄さんはどのような仕事をしていたのか、あまり話してくれなかつたな……。

ただ、私たちに知つてほしくなかつたのだろう。あの人は自分が苦しい時や辛い時、それに悲しい時ほど気丈に振る舞い自分の事を隠すのが上手かつたからな。……兄さんがそういう人間だと気づいたのは、それこそずっと後の話になるが。

話を戻すぞ。働き出した兄さんだが、あのひとはそれでも剣をやめなかつた。いや、やめられなかつたと言う方が正しいか。

兄さんはいつだつて『俺にや剣しか取り得がねえんだ』と笑いながら言つていたが、あれは正鶴を得ていた。それほどまでに兄さん

は剣にのめり込んでいた。だからこそ篠ノ之流剣術を習つた果てに、兄さんは独自の研鑽を積んで自分の剣を手に入れようとしていた。

ああ、その通りだ。普通は自分の剣など持つべくもない。新たな流派を生み出すようなものだからな。

……ただ、兄さんには才能があつた。剣士としての才能が。刀に愛される才能がありすぎた。

私は兄さんの後で道場に通い始めたからわからなかつたが、道場には篠ノ之柳韻さんとともに打ち合える人は兄さんしかいなかつた。いや、打ち合うと言つのは違うな。篠ノ之柳韻さんだけがまともに兄さんと『斬り合える』人だつた。

兄さんはおかしな人でな。竹刀、だらうか、木刀だらうが一度斬られてしまえば負けという考えを持つていた。それこそ半端な形で入つたものでも負けたと勝負を降りていた。ふふ……潔いなんて立派なもんじやない。あの人は頑固で勝ちたがりなんだ。だからこそ信念を決して曲げず、最後まで己の矜持を貫き通していた。剣であるが、ISであろうが、だ。

そんなんの人だつたからだろうが、剣の腕は天井知らずだつた。すぐさま柳韻さんを越えていつたよ。もう道場では誰も兄さんの相手が出来なくなつた。私も含めてな。免許皆伝の称号を僅か十代の子供が与えられたのだ、それほどの腕だつた。だからこそ、今度は

自分で腕を磨き模索するしか道は残されていなかつた。

苦しそうだつたぞ、あれは。普段明るい兄さんがそれを隠しもせずに汗水流して顔を歪ませながら、延々と剣を振つてゐるんだ。……正直、見てられないと思つたさ。だけどな『くはは、恥ずかしいところ見せちまつたな』と兄さんは私に気づいて言つたが、あれほど美しい時を、私は知らん。無骨で泥臭くて、慘めにも程があつたが、懸命に己へと問い合わせて一心に剣と向き合つ兄さんは、……そうだな、かつこよかつた。

だからこそ、私は兄さんの助けになりたいと思つた。兄さんがいなければ私はもつと余裕のない人間になつていただろう。だが、兄さんがいたからこそ私は中学高校に通えていけたし、一夏だつてそうだ。私たちは兄さんがいなければまともな生活さえ送れなかつた可能性がある。もしかしたら離れ離れになるかもしぬなかつた。だから私は兄さんに感謝して、人としても家族としても、そして剣士としても女としても憧れていた。

うん？ 好きだつたのかだつて？

はは、……そうだ、な。私は兄さんが好きだ。……うん？ おかしな事ではないだろう。何て言つたつて家族だしな。

だけどな、お前にもわかるかもしぬないが、あれほど優良物件な男なかなかないぞ。

良物件な男なかなかないぞ。

顔も整っているし、腕つ節も凄まじい。私と違つて氣さくで、更に経済力もあつた。

……それに、あの人は『世界で始めて IIS を動かした男』だ。兄さんのネームバリューはそん所そんらの男では太刀打ち出来ぬものだつたし、一夏が IIS を動かせると発覚するまで『世界で唯一 IIS を動かせる男』として業界の最前線を無敗で駆け抜けた人だぞ。あの頃、兄さん担当での追つ掛けは男女問わざ凄絶だった。そう言えば公式戦には必ず駆けつけ、移動のルートさえも押さえるような莫迦もいたな。つまりはだ、あの人以上の男なんているはずないさ。

…… ブラコンではない。事実を述べただけだ。

どこまで話したかな。……ああ、兄さんの腕だつたか。お前も知つてゐる通り、あの人は剣士としての信念に基づき、清々しいまでに己の剣を手に入れた。どうやつてか、と聞くな。あまりに無粋だ。……それに、言葉にしたつて理解は出来ないだろう。ならばこそ、実際に兄さんの剣を見たほうが早い。お前も見てきたはずだ。兄さんの太刀筋を。……だからこそ、言葉は不要だ。

事実、私は兄さんの剣術をとともに理解する事が出来なかつた。ああいうのは見ただけではわかるはずもないんだ。だから少なくとも、第一回 IIS 世界大会格闘部門決勝戦で兄さんと戦うまで、私は兄さんが高め続けた剣の極致を把握する事ができなかつた。

ああ、そうだ。お前の知つている通り、兄さんはあのモンド・グロッソで一度も被弾せずに戦い、しかもIISの特性を殆ど使用せずに勝利を収め続けた。ハイパーセンサー やスラスター ぐらいか？あの時使っていたのは。

更に兄さんは決勝戦で私と戦つまで、一度も地上から足を離さずに勝利してきた。……ああ、まともではない。

結果は知つてのとおり、私の負けだった。

けれどな、気持ちよく私は負けたのさ。

……負けたのに気持ちが良いなんておかしいって？ 確かに、お前にはわからんだろうな。いや、馬鹿にしたのではない。兄さんは剣士として私と戦い、私は剣士として兄さんに挑んだ。ただそれだけさ。それだけの事さ。……ただ、それが私には嬉しくてな。

研ぎ澄まされたものというのは実用性と共に芸術性さえ兼ね添えるが、兄さんのあれは違った。兄さんはあくまで剣士で、それ以外を認めはしなかったのさ。だから兄さんは自身のIIS『灰鶴』を纏いながら剣士としての自らでもつて在り続けた。

あの時受けた太刀筋は、今も覚えてる。あまりに鋭く、あまりに疾い一撃が空を切り裂きながら私の首を狙い、それを受け止めよつとすれば、いつの間にか私は斬られよつとしている。

兄さんの対戦者だつた相手の殆ど?『氣づけば斬られ、いつの間にか負けていた?と口を揃えて言つてゐたが、あれはそういう次元だつた。

剣は自身の扱い手である剣士を語るので。濃密な時間をかけられて練り上げた拳動、理合。ただ無作為に揮われた一筋の太刀が人生を物語る。だからこそ、私は兄さんのそれを受けられる事と、兄さんに全てを曝け出せたあの瞬間が忘れられない。無論、忘れたくもない。

少なくとも、モンド・グロッソで兄さんに負けた相手には悪いが、私は兄さんの太刀筋を理解できだし、更に一度だけだが兄さんを空へと飛ばした。あれだけでも私には誇りだ。

だから、私はブラコンではない。……次はないぞ、わかつたな?

……結局、剣士としての兄さんに敵う者もなく、兄さんは格闘部門優勝者となり、私は総合優勝を果たしブリュンヒルデなどと呼ばれるようになつた。

ああ、あの試合だけだな、私が敗北したのは。兄さんが他の競技にも興味を持てば、どうなつていかわ知らないが、兄さんは格闘部門しか出でていなかつたしな。

当然だ、私が兄さん以外に負けるはずがないだろ？

ふつ、そういうえばお前は知つてゐるか？ 兄さんが格闘部門で優勝した後、兄さんにどのよくな称号が与えられるか、少しもめてな。

結局、兄さんの試合を見た一般市民が兄さんを最後の侍^{ラストサムライ}と呼び始めてから、兄さんの称号はラストサムライとなつたんだ。

……似合わないとと思うが。確かに、似合わないし、私も似合わないと思つた。だけど、兄さんはあれを思いのほか気に入つていてな。あの人は時代劇とか大河ドラマが好きだつたからな。なんだか可愛らしかつたよ。

……ほう、何か言いたいよくな顔をしてゐるな。

……そうだ、世界は女尊男卑だ。兄さんの活躍はなかなか物議を醸していた。特に時の風潮に便乗した莫迦どもがな、いらぬ疑いをかけて兄さんを邪険にした時など、思い出すのも腹立たしい。今でも腸が煮えくり返る。……まあ、そいつらも時機に黙りざるを得なくなつたがな。

しかし、予想外な事に兄さんは世の男たちに受け入れられた。

恐らくだが、彼らは兄さんを世界で唯一の男性IS操縦者としてではなく、ただのもののふとして受け入れたのだろう。事実、調査によれば、兄さんが優勝した後子供の剣道部志願者が増加したという報告もある。一夏も剣道をやる奴が増えたと嬉しそうに言つてたな。

理由、はある。兄さんがISの特性を殆ど使用せず、ただ剣士としての力量のみで戦つていたからだ。

……納得のいかない顔をしているな。

確かにそれだけが理由というのは、おかしい話だがな。

だが、男性唯一のIS操縦者という立場上、兄さんは男に恨まれるはずだった。お前にはわからないだろうが、女尊男卑の煽りを受けた世の男性はISに良い感情を持つていない。

ISが配備されて職を失つたもの、女の理不尽な物言いに嵌められたもの、そしてそれを許す社会。男よりも女が優秀である、と根拠のない持論を展開して悦に浸る阿呆もいる。男が今の世を恨み、

憎むのは当然だった。そこに現われたのが兄さんだ。

……兄さんは剣士だった。あの人は剣士としてあり続け、剣士として障害を切り裂き続けた。

ISを纏いながら、己の剣士としての技量のみを駆使し、そして優勝した。

だからこそ、世の男性は兄さんを受け入れたのだと思つ。これがISという兵器を使用する男だったら、女からも男からも排斥されるのがおちだ。

そんな兄さんだから、第一回モンド・グロッソには特別招待者として呼ばれた。

ああ、お前も知つてゐるのか。あるいは当然か……まあ、いい。

そこで昨年総合優勝し今回も日本代表として参加していた私と、昨年格闘部門優勝者で他の国家代表選抜との特別マッチを組まれていた兄さんだが、一人して棄権した。

ん？ なぜ兄さんが特別マッチに参加したのか？

……そもそも兄さんはな、日本代表の座に興味を持つていなかつたんだ。競技として戦い優劣を競う事ではなく、ひたすら真剣勝負での勝ち負けに拘り続けた兄さんは、モンド・グロッソや代表と言つものにさえ見向きしなかつた。

では、何故第一回モンド・グロッソに参加したのか？

金だ。

兄さんはな、金が欲しいがためにモンド・グロッソに参加し、優勝したんだ。

軽蔑するか？ 兄さんを。

……そうか。お前も変わった奴だな。

実はな、兄さんは私たちの生活費を稼ぐためにモンド・グロッソへと向かったのだ。

その時兄さんは学校にも行かず、自らが唯一の男性操縦者であるというメリットを活かし、その情報や実験への参加で金を稼いでいた。あの莫迦に聞く限りだと、随分とあくどい稼ぎ方をしていたら

しいがな。その金で私たちの生活費をまかない、学費や必要費を払っていたのさ。

ほら、かつこいいだる兄さんは？

……こほん、話を戻すぞ。

第一回モンド・グロッソでの棄権だったか。あれはな、お前も知つてゐる通り、モンド・グロッソを観戦するためドイツに来ていた一夏が誘拐されたのさ、忌々しいことに、な。だから私たちは一夏を助けるためにモンド・グロッソを棄権した。

しかし、な。……兄さんは私よりも早く感づいたらしく、早々に一夏を救いに向かった。そこで兄さんは誘拐犯と戦い、左顔面を斬られ、左目を失った。

私はショックだったよ。

兄さんは『柳生十兵衛みたいでかつこいいじやないかい』となんでもない風に笑いながら言つてたが、兄さんに頼られていないと言う事も悲しかつたし、それ以上に兄さんを助ける事が出来なかつた自分が惨めで、悔しかつた。

しかも、兄さんはこの怪我を理由に現役を引退し、その後ドイツへの借りを返すため私の分まで伴つてドイツ軍の教導に向かい、少しも遭う事が出来なくなつた。

あれほど自ら無力さに絶望した事はなかつた。正直、兄さんがいない間、一夏がいなければ心が潰えてしまいそうだった。……それからだ、本氣で強くなろうと思つたのは、兄さんと並んで胸を張れる様に強くなろうとしたのは、家族を守れるぐらいに強くなろうとしたのはな。……だがな、私の分までドイツへと向かつた兄さんに申し訳がなくてな、だからこそ私は兄さんのぶんまで一夏と共にいよつとして、代表を引退したんだ。

……おかしいか？　家族のために今まで積み上げてきたものを台無しにするのは。

ふふ、言ひじやないか餓鬼。

私自身、後悔はしていないし、未練もなかつた。今でもあれでよかつたと思っている。あの時の選択は間違つていなかつたとな。それに、一線を退いて見えるものもあつた。

だからEIS学園で教師と成り、家に帰れば一夏と過ごす、そんな生活に満足していた。ただな、兄さんがいないのが淋しかつたよ。

……まあ、それも兄さんがドイツでの教導が終えて、IS学園で働く事になるまでだがな。その人が教師になるなんて、想像もしていなかつたよ。

あとはお前の知る通りさ。兄さんはIS学園で私と働き、そして……。

……まあ、いいだろ。この話はここ終るとしよう。

また機会があれば、何か話してやるさ。

始まつてしまつた連続投稿。
果たしてクリスマスが終わるまでに完結するのか。六にもわかりません。

HS学園一年1組在籍 山田真耶（前書き）

メリー・メリー・クリスマス！

私が始めて万春さんと会ったのは、万春さんがHS学園に赴任してきました時でした。

いえ、以前から万春さんは知っていましたよ。ほら、万春さんは千冬先輩と合わせなくとも有名人じゃないですか。だからよくテレビにも出ていましたし、モンド・グロッソでの試合や他の公式戦でも姿を見ていましたので、どういう外見なのが把握していました。左目の傷跡も印象的でしたし、待機状態の『灰鶴』が剣つていうのも様になつてゐるなあつてずっと思つていましたよ。

けど、あの時職員室で万春さんとお会いして、びっくりしました。

代表候補生どまりだった私からすれば、万春さんは雲の上の人だつたのでどうにも実際に会うまでその人がいると思つていなかつたのかもしれません。い、いえ！『世界で唯一の男性HS操縦者』だつた万春さんを疑つていていたわけではありませんよ！

ただ、本当に万春さんがここにいるんだつていう実感がなかつたんです。それにあの『織斑兄妹』が目の前にいると思うと、その、なんというかドキドキしちゃいまして……。

……先輩はHS学園の先輩でもあつたので、大丈夫だつたのです

けれど。そんな、ブリュンヒルデを慕うにしているわけではないのです！

初めて会った万春さんの印象ですか？……朗らかな人だなーと。あの、貶めてなんてません！

テレビや試合場で見る万春さんは触れれば斬れてしまいそうな、刃の切つ先みたいな人だつたんです。それに第一回モンド・グロッソでの万春さんの試合を見ていると、なんだか怖そうな人だなって思いました。視線も鋭いですし、立ち振る舞いもです。だから決勝戦で先輩と万春さんが並んだとき、本当に一人とも似てるって思ったんですよ。見た目がとかじやなくて、上手くは言えないんですけど、根本的に見えないところで繋がっていると言いますか。

だけど、職員室にいる万春さんは、その、とてものんびりと言つが、マイペースな方でした。『ま、気楽に行きましょうや』ってお仕事つて雰囲気に関係なく言つてましたねえ。

正直、あの時は万春さんじゃない人が来たんじゃないかって思つたんですけど、先輩と仲良く話しているあの人を見て、やつと田の前にいる男性と織斑万春さんが繋がつたんです。

それから万春さんはEVA学園で勤務しました。立場としては私の同輩に当たるんでしょうか。私、あのラストサムライと同じ立場にいるつて思うと、すゞくがちがちになつたの覚えてますよ。……もちろん、私と万春さんの意味合いはすゞい差がありますが。

教師としての万春さん、ですか？

そうですね。……何というか、いつもフランフランとしてました。いえ、そそそんな、悪口なんかじゃないですってば！

教師としてやつてきた万春さんでしたけど、あの人ガ担当しているのは実践訓練のみで、ほかの授業は担当しませんでした。……

といつよりも、出来ませんでした。

「うへ、……実は万春さん高校に進学してなくて、しかも中学校も殆ど通つていなかつた状態なので基礎学力の方が……。理由はそれとなく耳にしていますし、家族を養うためと言つことも聞いていましたけれど、でもやつぱり難しいんじやないかと思いました。

いえ、だからと書いて万春さんが教師として力不足だつたわけではありません。寧ろ戦闘という場面に關しては、あれほど理に適つた戦術理論を実践形式で見せながら教えられる方は万春さんを除いて他にいませんでした。

もともと万春さんは私なんかよりも遙かに長くISに関わった人です。それこそIS創成期からずっと活躍し続けてきた方ですから、経験といつ点で万春さんの話はとても貴重なものがありましたよ。……本当ですよ？

それに、万春さんは気難しい生徒と上手く付き合える方だったの
で、そちらのほうではよく相談に乗ってあげていたそうです。よく
万春さん『俺は無頼漢みたいなもんだしの』って言つてましたが、
そういう点の人を信頼する生徒も多かつたです。非公式ですが、
学園内でファンクラブがあつたのも事実ですし。

何故知つているかつて？　　えつと、実は私もそこに参加
していく、それで……。あの、これは先輩には内緒にしてください。
約束ですよ？

……ただ、万春さんは自分の役割をこなすだけで、それ以上の事
はしませんでした。

えつと、その。……万春さんは教師として非常に優秀だったんで
すが。……ええっと、真面目に働いてくれないというか、何と言つ
か、教師に向いていないといいますか。

いつも自分の担当はこなしていたんですが、それもたまに忘れて
しまいますし、しかも授業しても『まじいまじい』と煙草吸つて
ましたし。サボる事も多くて、それどころか職員室にいることも稀
で……。授業を担当する先輩の変わりに、よく万春さんを探しにい
きました。

だから、いつの間にか万春さんを探すのも私の仕事に入つていて

んです……「う」。

あ、でも、でも！ 万春さんよくそれで探しにいった私に色々とごちそうしてくれました。ご飯とか、ジュースとか「コーヒーとか。それで『山田は楽しい奴だねえ』と言つていましたが、私としては可愛いとか、綺麗とか、その……。

だだだだ大丈夫です、なんでもありません！

……万春さんがどんな授業をしていたかですか？

そりいえば、あなたは万春さんの授業を受けてないんでしたよね。

万春さんの授業は、その、なんというか、……すこかつたです。

万春さんが担当する授業は希望者のみが行える実践戦闘演習だつたのですが、あまりに過酷で人気そのものはありませんでした。私も一度参加させてもらつたのですが、……ついていくのがやつとでした。いえ、そんな軍隊みたいな訓練をしてたわけじゃないんです。生身での戦闘をはじめ、組み手、武装戦闘、そしてE.Sでの断続的模擬戦闘を延々と続けていくんです。……シールドバリアー機能を切斷して、ですけど。

『俺にやお前らに教えるもんなんぞ、なーんもねえんだ。だから勝手にわかれ』と万春さんは言つっていましたけど、万春さんは生徒に身体で覚えさせようとしていました。だからシールドバリアーを切つたIS訓練を行わせたり、ひたすら戦わせたりさせていました。そうですね、あれはISのために行う訓練と言つよりも、痛みを知るための訓練と言つたほうがいいでしょう。『痛くなかったら意味がねえ』……万春さんの言葉です。あの頃は千冬先輩の指導と合わせて、鬼の織斑兄弟なんて呼ばれていましたしね。

そんな授業をしているのですから、生徒さんには傷が絶えませんでした。皆さん女の子ですから傷跡なんてあつてはならない事なんんですけど、生傷はまだ良い方でした。中にはIS同士の衝突で骨折をした生徒もいますし、万春さんとの組み手で泣き出す生徒さえいました。正直、怪我人の総数はひどいものでした。

ええ、本当にすごかつたです。先ほども言いましたが、そんな事ばかりいつもするから、万春さんの授業に人気そのものはありませんでした。んですけど、万春さんの授業を選択して耐え抜いた生徒さんの殆どはクラス代表になりましたね。そして卒業後には国家代表へ選ばれた生徒もいます。

はい、凰さんや織斑くんがそうですね。お一人は万春さんの授業を選択して、見事に一年次ではクラス代表戦で優勝準優勝、そして卒業して遂には国家代表になつたんです。凄いですよねーお二人とも。

そんな訳で危険な授業ではありましたが、成果が認められていたため万春さんの授業は行われていたのです。

……選択した生徒さんの殆どが万春さんが面倒を見た子ばかりでしたので、彼女達の熱の入りよつは凄まじいものがありましたね。他の先生では難しかつた生徒さんが、万春さんの授業を受けてからまるで戦闘集団のような感じになつていきましたよ。

IS学園が幾ら兵器を教える学校とは言え、元々は普通の家庭で育つた女の子も多かつたはずなんですけれど、プロフェッショナルって言えばいいんでしょうか？　兎に角、学生という感じじゃなかつたです。何人かの生徒は彼女達に怖がつてさえいました。傷だらけの女の子達が集団でいるんですから。

あ、そういえば万春さん、剣術部の顧問でもありましたね。今は違う職員が担当していますけれど、発足後は部を立ち上げた万春さんが担当していました。

やつていた事は万春さんがやつていた授業の延長みたいなものだつたんですけれど、その……えぐかったです。

授業のほうはまだ授業としての形式があつて、しかも先輩の監視もありましたから大丈夫だつたんですけど、剣術部のほうはそれもあまりなくて、万春さんが思つよつにやつてたんです。

気分で変える時もあつたらしいんですけど、一対多での模擬戦や、無手対武装、超遠距離対近距離みたいな事を私が知る限りではやっていました。他にもどうやらとんでもない事をやつていたらしいん

ですけど、それを生徒さんに聞くと「地獄つて普通にあるんですね」と笑いながら言つていきましたね。……一体どんな事させていたんでしょ、万春さん？

……本当に厳しかつたですよ。私も今までのままじゃダメだと思つて、一度やらせてもらつたんですけど、……「う、今でもトラウマですよ。『はは、山田一回死んだの』って顔に当たる寸前で振りぬかれた剣は。

ただ、殆ど辞める生徒はいなかつたと聞きます。辞めるにしても己む無い事情によるもので、皆必死になつて訓練していましたよ。

ふふ、不思議そうな顔をしますね。

私も最初は不思議だつたんですよ。どうしてこんなに辛いのに万春さんにについていくのかつて。

でも、彼女達を見てたらなんとなくわかつた事があります。

万春さんはそんな気もなかつたんでしょうけど、彼女達にとつて万春さんの傍はひとつ居場所だったのです。訓練とかは確かに辛くて厳しいものだつたんでしょうけど、皆表情が輝いてました。

彼女達の半数はEIS学園で成績も悪く、それに素行も良くない子達ばかりでした。悪い子じやなかつたんですけど、なんというか、

個性が強い子ばかりで。それでクラスでも孤立してたり、やる気をなくして授業にさえ出る事を止めた生徒さえいたんです。 I.S 学園は厳しい学校ですから成績次第では退学ということさえありますから、残念ながら彼女達の退学は時間の問題とさえ思われていました。だけど、彼女達は万春さんと出会つてから大きく変わっていきましたね。

何せラストサムライが教えるのです。世界中でもこんな事滅多にありませんよ？ 万春さんの手解きを受けられて、辛い分だけ腕を上げる事が出来るのですから、強くなつていいく実感が持てたのでしよう。

それに万春さんの人柄もあつたんでしょうね。あの人は厳しいのに、本当に辛くてどうしようもない人がいると放つて置けない人ですか。あは、『 そんな柄じゃ ねえさね 』 つてもしかしたら言うかもしぬませんね、万春さんなら……。

え？ 良い表情をしてた？

えーっと、ありがとついざります？

まあ、そんな訳で万春さんと波長の合つた一部の生徒さんには極端に好かれていましたね。

その中には織斑くんや凰さんもいましたよ。

今では万春さん、千冬先輩、そして織斑くんを含わせて？・織斑三兄妹？とEIS業界では呼ばれるようになりましたけど、万春さんからはかなり厳しくされてましたね。授業や部活以外ではそうでもなかつたんですけど、こと戦闘においては他の生徒と回じように扱われてました。……皆それが嬉しかったようです。万春さんは頑張をしないんだって。

まあ、織斑くんが第一の男性適合者であるとわかつてから『さすが俺の弟だわの』って言つてましたから、弟さんが可愛くてしかたなかつたんでしょ？。

だから万春さんの弟子を名乗つていたラウラさんが転入した時は万春さんの教え子たち、荒れに荒れてしまったねえ。

あは、はは……あまり思い出したくはないんですけど、聞きたいですか？

……生徒さんからの要望ですから、仕方ありませんね。
はあ。

詳しく述べたわけではないので私も知らないんですけど、その時使用していた剣道場がめちゃくちゃになつて、怪我

人まで出たらしきですよ。それでもラウラさんに食つて掛かるんですかね、すごいですね。

なんか生徒さん歯怒つていたようで、しかも万春さんも『やるならとことんやつちまいまいな』とか言って止めようともしなかったので、余計に收拾がつかなくなつたそうです。結局先輩が止めきて事なきを得たそんなんですけれど、……ラウラさん、先輩にも斬りかかつたそうですよ。『師匠の栄光を汚した』と書いてたと報告もありますが。

……もしJの話を詳しく聞きたければ、ラウラさんに聞いたほうがいいですよ。やっぱり、私の口から言つてもビックリがおかしくなつちやいますからね。

あ、そろそろの授業の準備をしなくちゃいけませんね。

ふふ、次に万春さんが帰つてきたとき、私がしつかりしている姿を見せてびっくりさせようと思つてるんですー

それじゃ、行きますね？

……最後に、私が万春さんを好きだったかですか？

そうですね

。

それは、秘密です。

大人の女性は簡単に秘密を話さないものだつて万春さんが言ってましたしね！

オルコット家当主 セシリア・オルコット

決して。決して油断してたわけではありませんのよ。あの時私は万全の準備をして、自らの全てをぶつける覚悟を携えて万春先生の姿を捉えていましたわ。

万春先生のIS『灰鶴』は第一世代である『打鉄』をあの天災篠ノ之束が手を加え、そして独自に進化したものであり、全身装甲型の稀有なISでした。私も代表候補生として祖国で幾度も彼の姿を拝見していましたわ。

特にモンド・グロッソでのブリュンヒルデとラストサムライの試合は何度となく繰り返して見ていました。剣のみでもって斬り合つ織斑兄妹、そして片方は碌にISの機能を使用しない男性操縦者。だから灰鶴の姿は知っていましたけれど、目の前で見たのはあれが初めてです。

ええ、そうですわね。実際に見て最初は驚きましたわ。

全身装甲でありますながら現ISで最小、そして最軽量であるあのISに。

訂正しておきますが、そのようなISが開発されようとした傾向は過去にもありましたわ。ですが、あまりに脆く全力稼動を行えば

忽ち自壊してしまつISなど使用できるはずもなく、その計画すら凍結されてしまいました。しかし、ただ唯一『灰鶴』だけは別ですわ。

肩部バインダーを失い、ISの特徴である腕部脚部の装甲は既存ISと比べあまりに小さく、万春さんの身体にフィットした装甲が特徴のIS。それでいてISがISとして機能できる最低限のシリドバリアーで起動し、生体機能補助も停止させて、あまつさえ地上に降り立つてはいるのですから。

だからこそ、欧洲で『灰鶴』は『フラジール』の名で知られていました。一回でも被弾してしまえば全てのエネルギーが失われてしまうのです。……正気の沙汰ではありませんわ。

しかし、あの時は舐められている、と思いましたわ。『真剣で挑んでこい』と万春先生は仰っていましたが、幾らモンド・グロッソで優勝したとは言え、こんな男にイギリス代表は負けたのかと、憤りさえ感じてしまいました。

……後で思えば、なんて軽薄な事だと後悔しました。ですが、その時はそつやつてラストサムライを侮っていたのです。

うふふ、おかしいでしょう。あの織斑万春を目の前にして私は末だあの時ラストサムライを見くびっていたのです。織斑万春もまた私が知る下賤な男の一人でしかないのだと、思い込んでいたのです。

チエルシー、お茶のおかわりを。

……美味しいですか。そう、よかつた。それは先日、日本から取り寄せた煎茶です。紅茶は無論素晴らしいのですが、たまにはこうこうのも悪くないかと思いまして。それにあなたが来ると知れば、あの頃のこと思い懐かしむのも良いものです。

……ええ、本当に懐かしい。

もうすこし昔の事のように思えますが、実のところそんなに時間は経つてないんですね。なんだかおばあちゃんになつたような気分ですわ。ふふ……。

それほど、日本にいた頃が濃いものだつたのでしょうか。

初めて日本に降り立つた頃などなんて低劣な国なのかと思つておりましたけれど。……ええ、その時は本当にそう思つておりましたわ。根拠なんてないというのに。ですけど代表候補生であるエリートとしての誇りと、オルコット家への矜持があの時の全てでしたので、自然とそう考えていました。

今思えば、そつして誇る事でしか、自分を保てなかつた

のかもしません。

母や父を失つて、我がオルコット家を狙う輩から我が家を守るために頑張つて、努力して、それでどうにか一人が残していつたオルコット家を死守することは出来ました。けれど、余裕なんてものはありませんでしたわ。

……だつて、そのような事をしても、もう誰も私を褒めてはくれないのですから。

私の周りにいたのは下賤な男共や、資産簒奪を目論む野蛮な者ばかりで、誰も私が頑張つた事を誇りに思うような方は残つておりますでした。本当にいてほしかった人はいなくなつてしましましたし。

だから、あなたがいてくれて本当によかった。ありがとうございます、チエルシー。

……ふふ、そう言つてくれると嬉しいですわ。

そうですわね、話を戻します。

例え余裕がなくても、せめて優雅にありつとして私は胸を張り続

けていましたけれど、それが劇的に変わったのは私の IIS 適正が A だと判明した後です。

そうですね、純粹に嬉しかつたですわ。これでオルコットを狙う者の鼻をあかせると、実力でオルコットを守れると、本気で信じておりました。だからこそ私は死に物狂いで訓練し、代表候補生の座を手に入れました。

そのような状態だったからこそ、私は自然と女尊男卑の潮流を受け入れていたのかもしれません。

……いえ、これは言い訳ですね。

私が男性に抱いていた想いなど、ただの私怨でしかありませんでしたのに。まあ、それも一夏さんと戦った後になんだか莫迦らしくなつてしましましたけれど。

ああ、そういうば万春先生と戦うに至った経緯を未だ話していませんでしたわ。私とした事が、自分の話ばかりしてしまいましたわ。いけませんわね。

そもそも、あの時は授業の一環で万春先生のデモンストレーションを兼ねていました。

やはり万春先生ほどの有名人はブリュンヒルデを除いていませんでしたから。それに、お一方がモンド・グロッソで見せた決勝戦での立ち振る舞いを忘れられない方々も生徒の中にはいましたので、IS学園に入学できた一つの恩恵として万春先生の戦いを見ることが恒例になっていたそうですね。その時も万春先生の相手は通例どおり織斑先生か、もしくは山田先生を予定していたのです。

ですが、万春先生と戦うのは私になりました。……ええそうですわ、立候補したのです。

お一方には随分と渋い顔をされましたか、それでも譲るつもりはありませんでしたわ。

だつて折角ラストサムライと戦える機会があるというのに、それを手に入れないなどあつてはなりません。そうでしょう？

織斑先生には『代表候補生程度が何を抜かす』と脅されましたけれど、結局『たまにはそういうのも良か良か』と万春先生が仰つて下さったので、あの一時が許されたのです。一夏さんも戦いたかったらしいですけれど、『練習相手じゃ意味ねえんだ』とお止めになつたらしいですわ。

だと言うのに、私は万春先生を見くびっていたのですから、お話にもなりませんわ。所詮は過ぎた伝説だと、心のどこかで

思い込んでいたのかもしれません。

万春先生、普段は『腹が減った腹が減った』といつもお腹を空かせて、織斑先生のお弁当を楽しそうに『んまい、んまい』と言つたり、やる気のない姿ばかり見せていましたし、スーツもだらしなく着て、それで煙草をいつも咥えていたのですから。そんな姿を見ていたら、その人が強いだなんて思うこともありますわ。

……まあ、それも私が未熟だった。それだけの事だったのです。

試合が始まつた直後私は『ブルー・ティアーズ』を飛ばし、包囲網を作り上げました。その時地上で佇んでいる万春先生は結局包囲網が展開し終えるまで動きさえいたしませんでしたわ。

そう、あれは私に主導権を握らせるのではなく、あくまで万春先生がやらせてあげた形に見えましたけれど、実のところあの方はあれがひとつスタイルでした。何故なら万春先生に射撃はあまり関係なかったのですから。もしかしたら、障害にさえなつていなかつたのかもしれません。

……私は自分の力に自信を持つていました。未だブルー・ティアーズの運用に不安はありましたがそれでも遠距離からの銃撃を行えば問題はないだろうと。先日一夏さんの決闘を経た私にはどうやってこの距離を保ち、一方的に勝利を収めるかばかり考えておりました。

私はハイパーセンサーを使用して状況を確かめました。気候、機体状況、相手の武装、併まい、こちらの武装数。

……いけると、思いました。

でも予想を超えていましたわ。

最初は何が起こったかわかりませんでしたの。死角をつく形で強襲したブルー・ティアーズ一機のレーザーが切り裂かれたのです。

レーザー兵器は実弾よりも早い銃撃を可能としております。収束した光速の弾丸と言えばわかりますわよね？ その威力、その熱量、その速度は段違いですわ。それが撃たれた瞬間に散つてしまつたのです。

そして再びそのような事が起こり、私はようやく理解したのですわ。

事はシンプルでしたわ。万春先生は自らに向かつて撃たれたレーザーの狙撃を近接ブレード『絶景』で切り裂いただけですの。

ただその速度があまりに速過ぎて、私には万春先生が切り終えた後の姿しか見えなかつたのです。ただ、ハイパーセンサーを用いてどうにか確認することができました。

……ふふ、そうですね。とても理不尽ですね。

しかも『絶景』は一夏さんが持つ白式の『零落白夜』のような能力の产物ではありませんわ。『灰鶴』の単一仕様能力には純粹な攻撃力さえもつておりません。

万春さんはただ圧倒的速度で『絶景』を振り抜き、ブルー・ティアーズのレーザーを切り伏せてみせたのです。

ありえませんでしょ？ けれど、そんな理不尽が私の目の前に事実として現れたのです。

確かに万春先生が優勝した Mond·Grotz では銃器の使用はありませんでしたわ。でも、それは万春先生が格闘部門に参加したからです。近接戦闘という限定されたルールでの戦いだからこそ、万春先生は勝つ事が出来たのだと、私は思い違いをしておりました。

だつて、私は見落としていたんですもの。

万春さんが公式戦で見せた戦いといつもの。あのの方は相手がどれだけ距離を取り、一方的な弾雨を浴びせても、ただ己の剣で全てを切り開いたのです。

しかも、私は未だブルー・ティアーズの単体操作しか行えない未熟者。歯が立たないのは当然の事。

……あの絶望感は途方もないものでしたわ。私が今まで培つたものが何一つとして通用しない、何をしても無駄と言つあの無力感を。

それでも私は諦めきれずに銃撃を放ち続けました。ブルー・ティアーズの包囲網と共に、完璧に近いタイミングでミサイルを放ちもしました。それを万春先生は切り裂き、見切り、僅かな身動きで避けていくのです。一度も空を飛ばず、地面に足をつけたまま。

だからでしょうね。もう何も出来なくなつた私は、狙撃者としての冥利をボロボロにされて焦り、状況打破のためにインターセプトを握り締めて万春先生へと向かつていつたのです。狙撃者が自ら近距離戦を挑んだのですよ？ 結果は見え見えでした。

『氣づけば、私は負けていましたわ。

ええ、近づいた瞬間に私は『絶景』で切り捨てられ、絶対防御を

発動させていましたの。

斬られた瞬間の事はよく覚えていません。それを認識する間すら『えられず、私のブルー・ティアーズは敗れたのです。

……あの戦闘は未だ忘れられません。あれから私は何度も戦い、あるいは死闘へと巻き込まれましたが、あそこまで手筈も封じられ、一矢報いる事無く敗北したあの時を。まるで、魔法にかけられたようでしたわ。

実は一ヶ月前、私は第一回モンド・グロッソで万春先生に敗れた当時のイギリス代表と話す機会がありました。

彼女は万春先生との戦いを『蟻地獄か、攻城戦のようだった』と仰っていましたわ。後で確認してみると、確かにその通りでした。彼女もまた万春先生に一撃も『えられず、またその『灰鶴』に触れる事すら許されず撃墜されたのです。

だからこそ第一回モンド・グロッソで国家代表選抜との特別試合を万春先生が棄権したと知り、涙を流すほど怒り狂ったと聞いています。彼女は万春先生と戦うため、国家代表の座であり続けたというのに、その相手が自ら棄権し、どこかに消え去つてしまっていたのですから。

彼女がどのような気持ちを抱いたかまでは察する事ができませんわ。屈辱、怒り、諦観。そして安堵。様々なものが溢れて止まらなかつたと言っていますが、……事はそんなに単純なものではなかつたのかもしません。

当時、世界唯一の男性IIS操縦者であつたあのお方は人々の瞳に己の勇ましき姿を焼き付けていきました。ただ強い。己の剣士としての技量と、その矜持のみで戦い続け、優勝を果たしたあのお方を忘れる事など出来ませんわ。『俺にや剣しか取り得がねえしの』と言つていましたが説明など不要なぐらいに強くあり続け、そしてそんな万春先生に入々は引き込まれていつたのです。彼女もまた、あの人には心奪われた一人です。

あの、ファンタム・タスク亡國機業のHージェントと、同じように。

私ですか？

……うふふ、私はそうではありますわ。

確かに万春先生を教師として仰ぎ、慕つてはおりましたけれどこの心までは奪われませんでしたの。

だって、その時はすでに私の心は一夏さんに奪われていたのですから。

……でも、もしかしたら順番が逆で、私が一夏さんよりも先に万春先生と戦つていればわからなったかもしませんわ。それほどまでに万春先生は魅力的な男性でしたから。

大丈夫です。あなたが心配するようなことはありませんわ。

はあ。全く一夏さんや織斑先生といい、皆さんブラコンなんですから。

……もうあれから四年以上経ちますのね。

私はあの敗北が忘れられないからこそ今も代表候補生の座に甘んじております。

すでに一夏さんや鈴さんには先んじられましたが、国家代表の座を諦めたわけではありませんのよ。

私もすぐにあの場所に追いついて見せましょ。織斑先生や、万春先生の薰陶を受けた身として恥じないよ。

オルコットの名と、そして私自身の誇りにかけて。

オルコット家当主 セシリア・オルコット（後書き）

今更ながらに予約投稿の便利さを思い知るなあ。

中国代表　鳳鈴音（前書き）

メリクリ！

まあ、色々な人からあの人人の話を聞いてきたんでショウけど、私が言わせて貰えれば万春さんは泣き虫よ。それもショッちゅう泣いてたわね。

……いやいや、怒らせるつもりなんてないわよ。ただ私が思つてこらへんことを言つただけで。

それに、あんたは万春さんが泣いてるところなんて見たことないでしょ。そりやそうよ、だつてあの人あんた達の前では強がつてばかりいたんだから。

え、なんでかつて？

そりやあんた達が万春さんの家族で、兄妹だからよ。しかも万春さん兄妹で一番上の兄貴だから、弱いところなんて見せたくなかつたんじやない？ 立場にしても、大黒柱つて感じだつたし。本当のところはどうだかなんて、わからないけどね。

「しても、あんたよくそんな事聞くためにわざわざ」（中国）まで来たわね。電話でもする話ぢやない。……はあ、なんだかその自由さが羨ましいわ。国家代表になつてから色々と面倒なものが増えたから、本当にそう思つわよ。

ま、そんな事私には関係ないけどね。私は私で勝手にやらせてもらってるわ。

それで、なんで私が万春さんが泣き虫だつて思つてたのかつて言えば、私があの人と始めて会つたとき、万春さん泣いてたのよ。

ああ、どうしてそんな事になつたかまでは聞かないでよ。私もちやんとは知らないんだから。

小学五年の時だつたかしら。一夏と仲良くなつてちょっと経つた頃の事だと思うけれど、あいつん家に遊びに行つたのよ、私一人で。

そしたら一夏の奴がいなくて、しかも雨まで振り出すじやない。通り雨つてやつだつたんだけど、どうしようかと思つてたら鍵が開いてたのよ。その時私がこのままじゃ嫌だと思つたんだが知らないけれど、鍵が開いてるならつて家に入つちやつたのよね。

……不法侵入つて言わないと困る？ 私だつていけない事してるかもしれないってその時にはわかつてたんだから。

そしたら家の中で万春さんが寝てたのよ。

その時は万春さんが有名人だつて知らなかつたわ。モンド・グロッソが終わつた後の事だけど、万春さんの顔とか私興味なかつたし。『世界唯一の男性IIS操縦者』だと、そういう人がいるつてのは知つてたけど、所詮画面の向こうじやない。遠い世界にいる人に熱中するほどIISのファンでもなかつたしね。まあ、弾みたいてのめりこむ場合もあるけど。

……ああ、弾？ あんた知らないの、蘭の兄貴よ。

ふーん、あいつ教えてないんだ。……相変わらずね、あの二人も。

話戻すわよ。それで一夏にお兄さんやお姉さんがいるつて話はきいてたから、この人がその万春さんだつて気づいたの。万春さん帰国したばかりで、妙に疲れてたらしくてね、私が入つても全然起きないのよ。ありえないでしょ。『立てばもののふ、座れば剣士、歩く姿は武士の華』なんて海外では呼ばれてたあの人ですよ。いつくら寝起きを襲つても返り討ちにした万春さんがよ。モンド・グロッソでよっぽど疲れてたんでしょうね。……まあ、その時にはそんな事も知らなかつたんだけど。

そしたら何か気になつてね、万春さんの事が。じつと座つて見えたのよ。ああ、別にその時にかつこいいとか思つてなかつたわ。もちろんあの人はかつこいいけれど、でも小学五年生にそんな感性求めないでよ。ほら、子供ながらの直感つて言えばいいのかしら。なんだかこの人は違つぞ、つてね思つたんでしょうね。

でね、しばらくしたらさ、あの人が泣き出したのよ。

寝ながらね、涙流したのよ。

そうね、何だかショックだったわ。

私あの頃、男の人泣いてる姿をよく見てたわ。ISが登場して、男の人の立場がどんどん悪くなつていって、それでね。だから言つちやえれば男の人の涙なんて見慣れてたような気がするわ。

……でも、あれは別だったわ。何が何だかわからないけれど、ただその人が悲しい事でもあつて泣いてるんじやないかつて思つて、もしかしたら悪い夢でも見てるんじやないのかなつてね。でも寝てるからどうしようもないし、それにはじめて会つた知らない人だから起こすなんて出来ないわ。

それで私ね、気づけば万春さんが泣き止むまでずっと涙をふいてた。

正直止める事は無理だし、それでも何かしたかつたからかな。

それが万春さんとの出会いよ。

それから一夏が帰つてくるまで、一緒にいたんだけど、万春さん自分が泣いてた事に気づいてね。それでそれを知つた私に驚いてたよ。『まさか、誰かに見られるなんてなあ』なんて言いながらさ。

たぶんそれで籠が外れたんでしょうね。万春さん私の前だと泣けるようになつたらしいわ。……おかしいでしょ、十歳年下の女の子の前でしか泣けない男なんて。

だから、あの人は泣き虫なの。もうそれで私の中ではそういうイメージで固定しちゃってるわ。変えようもない。

嫌じゃなかつたのか、つて？

さあ、どうとも言えないわね。面倒だつて思つてもいたし、男が泣くなんてかつて悪いつて思つていたかもしれないわ。でもさ、それで私、一回だけ千冬さんに頭下げられた事があるのよ。『すまない。私だけでは駄目なんだ。私だけでは兄さんを助けられない』つて真剣な顔で言われてさ。……そんな事で頼られるなんて始めてだつたから、嫌だなんて言えないじやない。

それに私は私で悪い気はしてなかつたのよ。今だつてあの人比べればずっと子供だけど、それでも自分が誰かの役に立つて、しか

も必要とされてるってわかったからさ。それをうんと考えて噛み砕いて、理解して、その役目を受け入れたってわけよ。

だから、あの人の泣き顔はわたしだけのものよ。

……ずるい、ですって？ 残念ね、これはあんただってラウラにだって千冬さんにもそう、誰にも譲るつもりはないわ。万春さんの涙や弱い所、全部わたしのものなの。もうこれは決まった事よ、仕方のない事なんだから。

ああ、『じめん』じめん。元やけるのは止めるわよ。

でも、そうね。 あれが私の初恋よ。

そして、まだそれは続いている。

これから先、違う人を好きになるなんて考えられないくらい、私は万春さんが好き。

何よ、その顔。そりや本人が目の前にいないから、これべらいは言えるわよ。……まだ直接こんな事言える自信ないけれど。

だからさ、両親が離婚して中国に帰らなくちゃならなかつた時、どうしても中国に行きたくなくて家出までしたわ。

ずっと会えなくなるなんて、その時の私には想像できなかつたけれど、でも折角出来た友達や万春さんの傍にいられなくなつて、もしかしたら一度と一緒にいる事が出来なくなるんじやないかつてわかつちやつたからさ。

……それで、家出。いやあ、私も若かつたわねー。

走るだけ走つて、それで嫌なことから逃げるだけ逃げて。

私気づいたら知らないところにいてさ。見たことない景色に、見覚えのない地形。それに周りには知らない人ばかり。ほんと、どうしようかと思つたわよ。最悪、このまま死んじゃうんじやないかつて本氣で怖くなつて、その内不安で涙が出てきちゃつた。

そしたら万春さんが私を見つけてくれたのよ。『おお、なにしてんだ鈴音』って言いながらさ。うちの親が連絡とつたらしいんだけど、それで万春さんが探しに来てくれたつてわけ。

ありえない話でしょ。その人良い意味でも悪い意味でも身内にしか興味ないし、それも剣とどつちか大事かつてなつたら両方取るぐらいに大事にしてるからさ、その時なんて一夏や千冬さん以外に関

心持つてゐる人なんていなかつたんぢゃないかしら。私だつて一夏の友達で自分が樂になるために利用してゐて考へてたと思つわよ。

でも、實際に万春さんが私を探してくれたのよ。『帰る場所があんなら帰つたほうがええ。それでも帰りたくないなら俺んとこに来て』つて泣いてる私を慰めてくれてね、そのまま背中におんぶしてもらつて一緒に帰つたわ。

それがたぶん切つ掛けなんだらうけど、好きになつちゃつたのよねえ。ううん、好きだつたんだけど自覺がなかつたのよ。ただ、それに気づいただけ。

……おかしな事じやないでしょ。女の子つて大人っぽい男に憧れるもんなのよ、少なくとも私はそうだつたわ。万春さんがラストサムライつてわかつてからそれも凄かつたわよ。なんかもう、近所に住んでる友達のお兄さんから一気にランクが上がつて憧れの人つて感じで、ずっとついて回つてたような気がする。たぶん一夏と同じぐらい一緒にいたわね、あれは。

だけどね、向ひからずれば十歳年下のがきんぢょだつたから、全然まともに相手してくれなくてや。『鈴音は愛い愛い』つてさ。それが無性に腹立つたのよ。いくら一夏の友達だからつて、それ以上として見てくれないのはビリこう事だこんにやろー！ つて。

それでまあ、結局中国に帰つてからエスに乗つて、いつの間にか

代表候補生になつてたわけ。理由は才能があつたからつてのもあるけど、万春さんに認められるにはISしかないんじやないかつて、本気で思つたからよ。……一夏もきっと同じ気持ちだつた。あいつのほつが根は深いかもしれないけどね。

でも、日本に戻つて折角それを見せようとして、自分がどれだけ間違つてるかつて思い知つた事があるわ。

一年の時か、クラス対抗戦の時に一夏と戦つてたら無人機ISに襲われてね。そう、無人機。まだ実用段階でさえないものが実際に私たちを襲つてきてんだから、たまつたもんじやなかつたわよ。

それで、私は一夏と協力してどうにかそいつを倒したんだけど、そしたら壊したはずのそいつがまだ動けてて私たちにレーザー売つてきたのよ。私その時には完全に気が抜けちやつてさ、避けられるはずもなかつた。そのレーザー、アリーナの防御壁ぐらいなら簡単に壊せるものだつたら、『あ、死んだ』つて思つたわ。一夏がカバーに来てくれてたけど、それも間にあう感じじゃない。

それで死ぬんだ、もう万春さんに会うことも出来ないんだつて、何かその時色々と考えたわ。

……だけど、それを万春さんは切り裂いてくれた。直撃すればISぐらいい完全破壊できるビームを。しかも万春さんの『灰鶴』は一発でもダメージが入れば終わる代物なのよ。

どうなかしらね。自分から死ににいく人の気持ちなんてわから
ないし、そんな危ない場所に自分から飛び込んでいくような真似、
中々出来ないわよ。

私？ 私は……って、あんた。

……そんなわかりきつてる事を私に言わせるつもり？

まあ、いいわ。だからそれで私はますます万春さんが好きになつ
たけど、でも悔しくてさ。結局自分は何も変わらない、ただの子供
のままなんだな、てさ。全然万春さんに追いついてない。それどころか、目の前で見せられて初めて万春さんの核違いな強さを理解し
ちゃつたから。それで落ち込みもしたし、泣きそうになつたりもし
たわ。それまで持つてた意地とか全部忘れてね。

でも、あの人卑怯なのよ。そういうときに限つて、私を探してくれ
れる。

だけど、私つてば落ち込んで卑屈になつててね、素直に万春さ
んの事見れなかつたの。

そしたら、あの人なんて言つたと思つ？

『何も言つ事なんてないけど、お前が無事でよかつたわ』って笑いながら言つてくれたのよ。

……ええ、墮ちましたよ。墮落必至だつたわよ！

それで、万春さんの言葉でわかつたものもあるの。今はまだしょうがない。でもこの人に笑つて欲しいから、今度は私がこの人を守れるくらいに強くなつてやるうつてね。

笑いたければ笑えばいいわ。あの織斑万春を守るつて言つてるんだからね。私も頭おかしいんじやないかつて偶に思つわ。でもそれを私は正しいと信じてるし、これは私の道だからね。……間違つてたつて後悔なんてないわ。

だから、万春さんの授業も剣術部も耐えてきた。まあ、生身でI Sと戦えとか言われたときはこの人、人間じやないわつて怖くなつたけど。

だけどね、全部を凌いで飲み込んでいつたら実際に強くなつていつたし、万春さんと過ごす時間も多くなつたから良かつたわよ。それに、たまに万春さん私の頼みも聞いてくれるから、昔みたいにぶんぶんしてくれたしね。

……ラウラがだつこされるのは、なんか気に入らなかつたけど。

万春さんはまだ私を認めてくれない。少なくとも、こんぐらじやまだまだだつてあの人人に言われなくたつてわかるわよ。

だから今度のモンド・グロッソ。私は絶対に負けるわけにはいかないの。一夏なんかで躓いてられないわ。私は全部を追い抜いて、万春さんの隣に立つ。そのためなら千冬さんにだつて負けない。
…「う、ちょっと怖いけど。

にしても万春さんの隣にいる千冬さんとかすゞいお似合いのよね。というかやつぱり乳？ 乳のかしら！？ 千冬さんといい、山田先生といい、やつぱり大人の魅力は乳で決まるつてーの！？

ちょっとあんた。あんたまで胸でつかくなりやがつたら、それをもいで私の糧にしてやるからね！

中国代表　鳳鈴音（後書き）

十歳年下に泣きつくる男。
なんかすじこいな。

年を経てもちつぱい鈴。これでいい、六もそれがいいと思つ。

デュノア社社長 シャルロット・デュノア

遠いところからわざわざありがとう。久しぶりだね、皆は元気にしてた？

そつかあ、皆相変わらずなんだね。ふふ、なんだか嬉しいなあ。自分で変わらないでいたら、それはそれで置いてけぼりされちゃつたみたいなものだしね。

それで、何を聞きたいのかな？ 応えられるものなら答えるけれど。

……なるほどね、万春先生の事か。

うーん、そうだなあ。ちょっと難しいかなあ。……ああ、ごめんね。折角来てもらつてあれなんだけど僕にあんまり喋られる事なんてないと思うよ。君が聞きたいようなものがないかもしれないし。それでも良いの？

うん、じゃあわかった。僕が知ってる万春さんの事だけでも良いなら話すよ。

でもさ、君も知ってる思つれど。……僕、万春さんの事苦手だ

つたんだよね。だからあんまり仲が良かつたわけでもないし、一緒にいた事も少なかつたんだ。

ああ、嫌いだつたわけでもないし、直接何かされた事だつてなかつた。それに先生としては尊敬もしてたから安心して。だけど、ちょっと先生らしくない人だつたかな。いつもだるそうに煙草吸つてたし、『今日は何食つたつけるか?』つてお腹空かせてたしね。懐かしいなあ。

ただ単に僕が勝手にあの人に苦手意識持つてただけの話しだよ。

……なんでかつて？ あはは、いきなり踏み込んでくるね。

そうだね、なんでだろう。ずっとそれがどうしてなのか僕にもわからなかつたんだ。でも IIS 学園で万春先生と会つてからしばらく経つて、それで卒業してから会社を乗つ取つて、ようやくわかつた気がしたんだ。

僕はね、あの人気が苦手なんじやない。あの人気が怖かつたんだ。

僕も皆と同じように、万春さんの事は知つてたよ。IIS に関わる前からね。『世界唯一の男性 IIS 操縦者』で、第一回モンド・グロッソ格闘部門の初代優勝者。近接ブレード『絶景』のみで戦い、全てを切り裂いた飛ばない戦士ラストサムライ。すごいよね。

……とても僕にはそんな真似できないよ。

でも、モンド・グロッソや引退前の公式戦を見て、ちょっと違和感で言うのかな、引っ掛かりみたいなものを感じてたんだ。それが何なのかまではわからなかつたけれど、見れば見るほど『フライジール』を操るラストサムライの姿が目に焼きついて、それが嫌だつた。

理由もわからずにな。

君も知ってるよね、万春さんの強さ。世界でたつた一人しかいないうISを使える男の人だけ、戦つてるのは対戦相手だけじゃなくて世界だつた。

女人しか使えないISを男の人が操縦できるんだから、きっと女人の人からも男の人からも厳しい目で見られてたと思うよ。……それに、ISつていう兵器に乗つて戦うんだから、どんなに怖いんだろう。誰かが助けてくれるかも怪しい世界で、あの人はたつた一人ぼつちだつたんだ。

そうだね、僕はそつやつて万春先生に自分の気持ちを押し付けて、自己投影してた。

特にお母さんが亡くなつて、父に引き取られてからそれが強くなつていつたよ。当時のデュノア社で僕はたつた一人で、誰も助けて

くれない。父は僕を政治の道具にしか見ていなかつたし、相手の母は僕を目の敵にしてた。仕方ないかもしれないよね。自分の好きな人を取られていた形で、しかもそれに全く気づかなかつたんだから。

……それから僕はずつとあの人を追いかけてた。表には出られなかつたけど、公式戦の記録データを貰つて見続けてた。この人は僕と同じように独りぼっちなんだつて思いながら。

でもね、あの人は全然そんなの関係なかつた。

世界とか、兵器とか女尊男卑とか関係なくて、目の前にあるものはなんだろうが切り捨てていつた。それがどれだけ凄い事かすらどうでもいいようにね、障害や壁を切り開いていつたんだ。

……僕はね、嫌な奴なんだ。そんな万春先生を見て、嫉妬さえしてたんだから。なんでこの人は僕と同じように一人ぼっちなのに、こんなに強いんだろうって。何も出来ずに流されるしかない僕には眩しくて、……苦手になつた。

だからさ、一夏が現われてEIS学園に男として転入するつてわかつてから、チャンスだつて思つたよ。直接この目で確かめてやるつてさ。父の言い分に従うしかなかつた僕だけど、それだけは譲れなかつた。そもそも一夏のデータを盗む呈で行く事になつてたけど、優先事項は違つた。僕にとつて一夏よりもラストサムライのほうが重要だつたんだ。

でも、直接万春先生を見てから、そんな気持ちもなくなつたよ。

あの人さ、初めて会つたときに僕を見てたんだ。ラウラに抱きつかれてぶらさげながらもさ、『余計な事すれば首もつてくぞ』って言つてるのが目を見てわかつた。なかなかないんじやないかな。初めて会つた人に殺氣をぶつけられるなんて。

その証拠に待機状態で刀の形状をしていた『灰鶴』をいつでも抜けるようにしていたからね。見せ付けるみたいに。

……万春先生は全部わかつてたんだ。僕が女で、一夏のデータを盗もうとしているつてさ。まあ当然かもしれないよね。IS学園がそんな簡単に行くはずもない。しかも相手は織斑兄妹。ブリュンヒルデとラストサムライ。特に『世界唯一の男性IS操縦者』だつた万春先生は情報スパイの相手なんて飽きたほどやつてたみたい。僕みたいな小娘がどうにかできるものでもなかつた。

あの人は僕が思つてたような人と全然違つてた。僕は勝手な思い込みであの人に自分と同じ一人ぼっちな人と見当つけて、それに縋つてたけど、でもそんな事はなかつた。万春先生には織斑先生がいて一夏がいて、それにラウラや鈴やもつとたくさんの人人がいた。一人ぼっちでもなんでもないよ。……それですごく怖くなつたんだ。結局僕は一人ぼっちで力を持たない奴でしかないんだつてね。

それから僕は一夏にばれたんだよ、女だつて。

……まあね、気が抜けてたというか、一夏を舐めてた結果だね。

それにね、その時には僕はもうなんだか全部がどうでも良いやつて思つてたんだ。変な話じやないでしょ。望みは違つた。僕の勘違いで。それだけで僕はもう駄目になっちゃつたんだよ。だから一夏が誰かに話しても抵抗するつもりもなかつたし、フランスに戻されても逮捕されても仕方がないなつて思つてた。

でも、一夏は言つてくれたんだ。『俺が助ける』つてね。

嬉しかつたなー。始めてだつたんだよ、そんな事言われるの。

あ、一夏の話になつてたね。『ごめんごめん、話戻すよ。

でも、一夏だつて関係してるんだよ、この話。

一夏はさ、ずっと家族の助けになりたいつて思つてたんだ。ブリュンヒルデとラストサムライが兄妹つてすごいけど一夏は一夏で色々考えててさ、話は聞いてたんだけど万春先生の左目に走つた傷跡

つて誘拐された一夏を助けるためについたものなんだ。それを一夏すごい気にしててね。それを理由に一人とも現役引退しちゃつたら、余計にそう思つてたんだと思うけど、『一人が弟として家族として、一人の男として誇れるようになりたいんだ』って言つてた。

……敵わないなあ、つて思つたよ。一夏は僕と違つて流されずに、強くなろうとしてた。万春先生や織斑先生と同じだね。皆自分のために、誰かのために強くなつてた。

だからさ、僕も頑張ろうつて決めたんだ。今まで一度もそんな事考えずに、流されていつか楽になれるつてじつと耐えてきたけど、……抵抗するだなんて想像もつかなかつたけれど、それでも許されるなら自分の未来は自分で切り開きたい。

その結果が今だよね。もひこの会社は僕のもの。

……ふふ、笑つちゃうでしょ。僕だつてあの頃には夢にも思わなかつた。

我儘に生きて、自分の思う自分になるためには強くならなくちゃいけないんだ。勿論それは純粋な強さじやないよ。誰にも負けない、意志と心の強さ。それを僕はE.S学園で学んだ。それがなくちゃ、僕はあのときつと潰れてただろうね。

まあ、これも万春先生の受け売りだけビ。『単純な強さは純粹な強さほど輝かない』って。

でも、それを強く思ったのはツーマンセルトーナメントの時かな。

あの時僕は一夏と組んでラウラや幕と戦つてたんだ。でもね、ラウラは僕やパートナーだった幕にも興味なくて、一夏だけを狙いつけてた。

なんだろうね。因縁つて言えばいいのかな。ラウラはずつと一夏や織斑先生を目の敵にしてたんだ。理由はラウラが万春先生の弟子で、ラウラは万春先生が引退する切っ掛けになつた一夏や、それに妹である千冬さんを恨んでたからだよ。ううん、あれは憎んでたつて言つてもいいよ。だつてあの織斑先生に真っ向から反抗してたんだから。それぐらいすこかつたんだ。しかも転入初日に一夏をビンタして床に叩き落したんだよ。

……信じられないでしょ。君が知ってるラウラから見れば、そんな事するはずがないよね。いつも鈴と一緒にラウラつたら万春先生につかまつておんぶにだつこされてたんだから。あの二人可愛かつたなー。『あんた降りなさいよ！』『貴様が降りるがいい！』つてずっと引っ付きながら言い合つてたつけ。

だけど、それだけじゃなかつたよ。僕はその時いなかつたけれど、

ラウラ万春先生が顧問をしていた剣術部に乗り込んで、部員全員を滅多打ちにしたらしいんだ。

ラウラは軍人で、しかも万春先生の弟子だったからね。皆も善戦はしたらしいけれど負けちゃったんだ。んでね、それに一夏が怒つてね。組み手するはずだったんだけど、織斑先生に止められた。

『好きにやらせるのが良いんだぞ』って万春先生は言ってたけれどね、結局因縁はツーマンセルトーナメントに持ち越した。

正直ラウラの気持ちがわからなくもなかつたんだ。

あの子はね、あの時万春先生しかいなかつたんだ。仲良くなつてから聞いたんだけど、ドイツ軍で駄目になつていた自分を救つてくれたのが万春先生だつたんだつて。誰からも見放されて、誰も助けてくれない自分の前に現われて強くしてくれたのが万春先生たつた一人だから、ラウラは万春先生以外いらなくて、万春先生たつた人を求めてたんだ。

……まるで僕みたいでしょ？ 理由はどうであれ、僕たちは違う形で万春先生を求めてた。だからね、どうしても他人事のようには思えなかつたんだ。この子も僕と同じような人だつたんだつてね。でも僕はその時頑張るうつて決めたからさ、ラウラにだつて負けやしないつて覚悟を決めたんだ。一夏だつてそつだつた。

……ここから先の話は守秘義務に引っ掛かると思つけど、大丈夫？

そつか。じゃあ、誰にも言わないつて約束だからね。もし喋つたら、怖いよ？

異変が起きたのは、篭を倒してラウラを倒しかけた時だつた。ラウラの『シュバルツェア・レーGEN』がね、変化していつたんだ。

そしたらさ、僕たちの前に黒い『灰鶴』が現われたんだよ。

そうだね。あれはVTSシステムによるものだつた。違法なはずだつたんだけど、何故かそれがラウラの機体に組み込まれていたんだ。何故か、なんてわからない。ただ現実として僕たちの前に『灰鶴』が現われたんだよ。

『灰鶴』はね、当時のISで最も壊れやすいISとして知られていて『フラジール』つて呼ばれてたんだけど、あの威圧感はそんなもの感じさせなかつたよ。『絶景』を腰に構えていつでも切りかかる体勢のまま佇んでいる姿も、万春先生の姿そのままだつた。でもあれは『灰鶴』じやなかつたのは一目瞭然だつた。だつて、『灰鶴』がPICで浮遊してたんだもの。

欧洲で『灰鶴』が『フラジール』って呼ばれるのはね、ISで
ありながらISではない戦法をやるから、それの侮蔑が込められて
るんだ。空も飛ばないで、いつだって壊せるはずの機体だから『フ
ラジール』。

だからだろうね。一夏はものすごく怒った。そりやそう
かもね。だつて憧れだつた自分のお兄さんの姿を真似られて、しか
もそれが偽者なんだから。あの時の一夏はすごかつたよ。たぶんあ
れほど一夏が怒ったのは、あれぐらいじゃないかな。

それで一夏は『灰鶴』に挑んでいった。でも、やつぱり偽者だろ
うとも『灰鶴』は『灰鶴』だから、一夏は全然相手にならなかつた。
速過ぎて斬られた後に斬られたつてわかるしかないほど、圧倒的な
剣の冴えで『灰鶴』は一夏を切り捨てていつた。

だけど、一夏は全然諦めなかつた。敵うはずもない相手だつてわ
かつてたのに。

でもね、一夏さ『こんなもんで行く道引いてられつか！』て叫
びながら斬りかかつていつたんだ。

かつこいいよね。あんな真つ直ぐな人、他にはいないよ。

……一夏にとつて万春先生つてどういう人なんだろうね。今でも

わからないんだ。憎んでもないし、嫌いでもないし、それどころか大好きだって言つてたしね。でも、追いついて乗り越えたい相手だったのかなあ。

ほら、男の子つて絶対負けられない、負けたくない相手がいるんだ。それが一夏にとつてはお兄さんの万春先生だつたんだろうね。それがどういう気持ちからくるものかわからないけど、僕はそういうよ。

結局その後、ラウラが負けて『灰鶴』の姿も消えた。一太刀だけ掠つた零落白夜が『灰鶴』を消し飛ばしたんだね。『灰鶴』のそんなどころまであれはトレーースしてた。

……実は僕さ、試合の後で万春先生の事見かけたんだ。結局後の試合が全部無くなつちゃつたから、他の生徒とかの事で忙しかつたはずなんだけど、織斑先生が気を失つていた一夏を看ている間、万春先生はずつと外にいたんだ。

それが気になつて僕ずつと見てたんだけど、万春先生煙草吸いながら遠くを見てたよ。ずっと、ずっと遠い所、見えないとこを見るように。なんだか話しかけちゃいけない雰囲気だつたからそのままで一夏の所に向かつたけど、あの時万春先生は何を考えてたんだろう。

僕が話せるのはこれくらいかな。『ごめんね、あまり目新

しい話じゃなかつたでしょ。

……そう、そう言つてくれるとこいつちも助かるよ。

じゃあ、そろそろ僕は行くよ。まだまだ会社が奮つてないからね、あと少しで上手くいきそうだからもう一頑張りしないと。

辛くないのか、て？

確かにちょっと疲れる事は多いけれど、今は楽しいからね。それにフランスだと僕ちょっとした有名人なんだ。悪い父や母に虐げられた娘が復讐に正義を示すって。はは、ちょっとした英雄譚みたいなことになつてるんだよ。だから応援してくれる人もいるし、全然辛くない。

君は、今度はどこに向かうのかな？

デュノア社社長 シャルロット・デュノア（後書き）

シャルのイメージは少し計算高い女の子って感じ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7546z/>

デスティニーな兄

2011年12月25日12時49分発行